都市デザインによる都市の再生

特集　先進の都市づくりを目指して

快適な場所／美しい空間こそ有益投資

“資本”に求められる審美眼とホンモノ志向

建築家・博士（工学）
千葉大学大学院准教授
岡田　哲史

「先進の都市づくりを目指して」という企画のもと、どちらかといえば建築デザインのほうに軸足をおく筆者に与えられたテーマが「都市デザインによる都市の再生」であった。察するに本稿依頼の目論見は、都市学／都市デザインにとっての門外漢に、「都市」について他者の眼差しを投じてほしいということなのだろう。

私自身、四半世紀を超える設計活動のなかで、対象のスケールいかんにかかわらず都市も建築も同じテーブルのうえで扱うべきものと考えてきた。大学院時代にニューヨークで欧米気質の建築教育を受けたあと、駆け出しの10年間は歴史家として18世紀イタリアを研究対象にしていた関係でローマやヴェネツィアに通い詰め、近年では設計実務や研究教育の仕事で、欧米諸国のほか、ロシア、東欧、中東、オセアニアなどの主要都市に滞在する機会も多くなり、折に触れては日本の都市や建築を振り返っている。

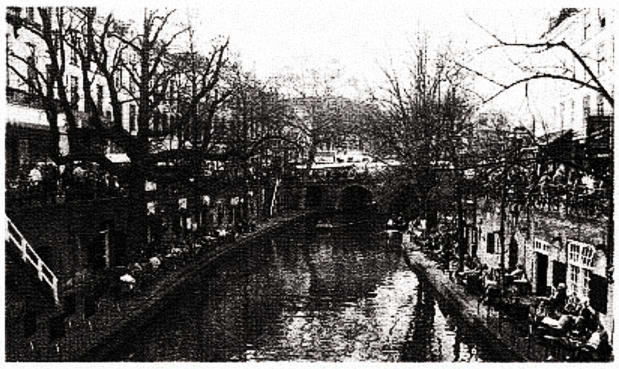
他方、「デザイン」という括りでみれば、都市デザインも建築デザインも「対象に関する未来の姿をイメージし、描き、それを実現させる営み」という点ではかわらない。建築デザインの実践では、空間からディテールまでクオリティ最優先の設計を心がけているが、いまなお古今東西を問わず美しい街並みや建造物に触発されながら一過性の流行に左右されないデザインを追求している。

デルフトの賑わい（オランダ）

そんな私が長年生活の拠点としている「東京」にいつも感じるのは、風景のとりとめのなさである。反対に、とりとめのある街の風景を仮に「美しい街並み」というのなら、それを感じさせる場所が圧倒的に少ないのだ。それは高層ビルが立ち並ぶ都心においても然り、そこが高級住宅街と呼ばれる一等地であったとしても然りである。しかし多くの人にとってみれば〝住めば都〟で、「どうしてこんな都市になってしまったのだろうか」と疑問に思う人のほうが少ないというのが現実だろう。

都市計画の大家蓑原敬氏によれば、日本の近代都市計画は未完のまま今日を迎えてしまっただけでなく、その間に実践された都市デザインも未熟であったとし、国土利用計画も都市計画マスタープランも策定されることはあっても、それがそのとおりに実施されてきたためしがないという。それが原因のすべてではないにしても、都市の成長が速すぎて、役所でつくる政策も大学等の高等研究機関で取り組む学問もそのスピードについていけなかったというのが現実だったにちがいない。かつてコロンビア大学で「日本」をテーマに議論したとき、ロンドン出身の友人が「日本が戦後わずか半世紀で経済大国になったのは驚異的だ」と発言し、ハッとさせられたのを思いだす。他者の眼にはその成長のスピードが尋常ではないと映っていたのである。

ところがそんな東京も、海外から訪れる旅行者の眼にはエキサイティングで刺激的な街に映るらしい。これまでにも海外からの友人を何度も東京案内しているが、彼らがその都市に魅力を感じる理由は、そこに自分が馴れ親しんだ街とはまったく異なる世界が広がっているからだという。ちなみに東京をお世辞にも「美しい街だ！」と感嘆した者はひとりもいない。東京を、そして日本の都市を「無秩序」とか「混沌」というクリシェで表現し、「身体性」とか「人間味」といった上等な話に結び付け、それを美化する輩まで出てくる始末だ。かつてゲーテがローマを訪れたとき、古代建造物の廃墟が退廃的なムードを漂わせる「ローマ」にメランコリックな詩情を抱き美化したが、その18世紀の話と同じではないか…。しかし大事なのは、ゲーテがそうした感傷に浸ることができたのも、彼がローマよりも遥かに美しい街に帰れることが約束されていたからにほかならない。異邦人が感じる日本の都市の魅力も、彼らが退屈なほどに美しく快適な故国の街並みに帰れるという保証があるからなのだろう。



ユトレヒトの賑わい（オランダ）

さて、「都市デザインによる都市の再生」に話を戻そう。さしあたって「都市の再生」には「都市の劣化」が含意されているわけだが、今後の日本において、劣化した都市を公的資金で手厚く面倒みるなどもはや考えられない。多額を要する建設事業に公の資本を投入するのであれば、まずは事業の目的を明確化し、確実にリターンが見込めるスキームを見極めることが肝心だ。その意味で、官民の叡智を結集して取り組むことのできる官民連携（ＰＰＰ）は有効な手段と思われる。しかしそれでも民間資本がその事業内容に魅力（＝投資価値）を認めないかぎり連携は成立しないわけだから、「都市の再生」は局所的かつ限定的なものにならざるをえない。それは言い方をかえれば「選択と集中」である。都市のなかで事業の目的に叶う場所を慎重に厳選限定し、そこに資本を集中投下する（つまり中途半端な投資はしない）姿勢と、それを貫徹する勇気が要請されるだろう。そしてそれがどんなに小規模な再生事業だったとしても、成功事例をひとつひとつ積み上げ、市民から事業に対する信用を得ながら、点から線へ、線から面へと地道に展開していくしかないだろう。ついでに付言しておくなら、今後の人口減少に伴い都市のなかにも確実に空地や未活用地が増える。しかしそれは必ずしもネガティヴなことではない。むしろ小規模な再生事業にとってはチャンスと捉えるべきではなかろうか。

ヒューマンスケールを超越した都市（ドバイ）

ところで、その「都市の再生」を叶えるための手段としての「都市デザイン」は、どんな役割が求められるのだろうか。結論から言えば、それは「場をつくること／空間をつくること」である。再生の目的が何であれ、そこに人々が憩うことのできる快適な場所／美しい空間がなければ元も子もない。「快適な場所／美しい空間をつくる」という発想は、ビジネスを行う側からみれば無駄な投資に繋がらないかと危惧する向きもあるだろう。しかしその発想を危惧へと短絡させる機制は、いわば20世紀の近代主義が私たちに残した薬毒のようなもの。少なくとも現代においては「快適な場所／美しい空間をつくること」がむしろビジネスに繋がると考えてよい。それは再生の事業プログラムが、観光に特化した内容であろうと、文化に特化した内容であろうと、あるいは福祉に特化した内容であろうと、すべてに通底する基本である。

「快適な場所／美しい空間をつくる」ことで要請されるのは、正真正銘のホンモノ志向である。〝切った貼った〟のキッチュな街や建築は、「都市の再生」という名のもとで、わざわざ新たに数を増やさなくても、もうすでに都市のあちこちに溢れかえっているではないか。「快適な場所／美しい空間をつくる」うえで、最も重要な鍵は「ヒューマンスケール」が握っている。それは街を構成する要素、すなわち複数の建物、建物単体の内部空間、街路、緑地、さらには街灯やベンチといった小物にいたるまで、ヒト／モノ相互間のバランスに対する細やかな配慮がなければ実現しえないほど、豊かな知恵（そこには豊かな感性も含まれる）が要求される。

ちなみに欧米の大学では、この〝言うは易く行うは難し〟の難題に基礎教育として徹底して取り組ませるため、社会の底が抜けてしまうようなことはない。翻って、どこかの国のように、頼りないデータに尤もらしいコンセプトを振り翳し、屁理屈捏ねればデザイン完了といった程度の教育を続けていると、人間も建築も都市も早々に劣化してしまう。さしあたって教わる側に罪はない。となれば教える側の劣化こそが重大な社会問題ではないのか。いまグローバル化を叫びたいのなら、世界を知り、他者の眼差しを含め、広く深く吟味できる指導者の育成が急務ではなかろうか。

海外から日本を訪れる人の数は今後ますます増大するだろう。そんななか私たちに課せられた役割は、退屈なほど美しく快適な故国をもつ彼らが、その国に帰らなくても済むような場所や空間をつくることである。そうすれば日本の都市はこれまで以上に輝きを増すだろうし、それによって豊かな人材を引きとめられるというのであれば、国の活力維持にも貢献できるのではなかろうか。

一般財団法人
建設業振興基金
理事長　内田俊一
〒105-0001　東京都港区虎ノ門四－二－十二
（虎ノ門四丁目MTビル二号館）
電話〇三（五四七三）四五七〇

保証事業を通じて
安全で活力のある社会を創るための
お手伝いをしています
東日本建設業保証株式会社
本社　〒一〇四－八四三八
東京都中央区八丁堀二－二十七－一〇
電話　〇三（三五五二）七五二〇
建設産業図書館　https://www.ejcs.co.jp/library/cil.html

一般社団法人
日本建設業連合会
会長　山内隆司
副会長 土木本部長　宮本洋一
副会長 建築本部長　押味至一
〒104-0032　東京都中央区八丁堀二－五－一
（東京建設会館八階）
電話　〇三（三五五三）〇七〇一（代表）
FAX　〇三（三五五一）四九五四
http://www.nikkenren.com

一般社団法人
全国建設業協会
会長　近藤晴貞

一般社団法人
全国中小建設業協会
会長　豊田剛
URL:http://www.zenchuken.or.jp

一般社団法人
日本建設業経営協会
会長　原眞一

一般社団法人
日本道路建設業協会
会長　増永修平

東京を造る、日本を創る
一般社団法人
東京建設業協会
会長　飯塚恒生

一般社団法人
東京都中小建設業協会
会長　山口巖